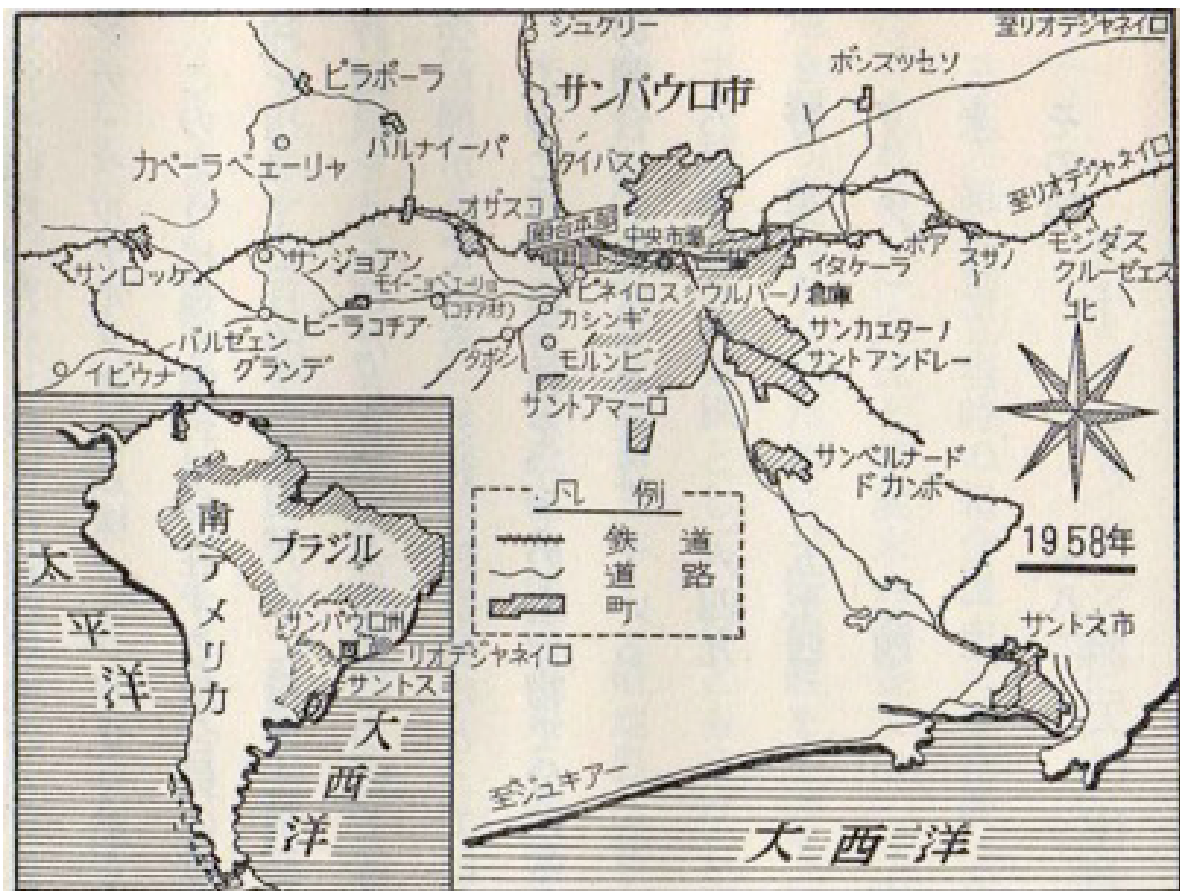


第二章 北上する初期配耕者

1914年グアタパラ耕地副支配人平野運平の配下には東京外国語学校出身の独身インテリ青年が群れていた。コーヒー耕地の束縛されたコロノ生活の陰惨な明け暮れを、明朗化した植民地生活に転向さすべき自由の血が燃えていた。平野副支配人がビラ・アドルフォのコーヒー栽培を請負、コロノを植民地建設の前提へと導いた頃、彼の配下の滝沢仁三郎（東洋移民会社の練習生、1913年10月渡伯）、富岡漸（すすむ）（神奈川県山梨県出身で、男爵“バロン”の次男坊）はモジアナ線コンキスタ奥ラジアーダ耕地へ転出、ただし同じ配下の馬場直（すなお）はグアタパラ駅近くのモツカ駅へ、これらインテリ青年派はグアタパラ耕地を去って、彼等独自の開拓進路を取った。（照葉林、「西部パラナ邦人発展録」37ページ）



コチア産業組合 30年の歩みより転載